

～塩川コレクション「動物たちのフィギュリン」と、120 年前の花瓶の「蓋の復元」を中心に～



塩川コレクション

ロイヤル コペンハーゲンの アール・ヌーヴォー

2019.4.20日 ~ 8.25日

ロイヤル コペンハーゲン(会場: 市川市立美術館)10000、15000
 【地下 本館階】ゼインター・パルク 和 本館階【ゼインター・パルク】10000、15000(和・本館階)【本館階】10000、15000

JAPPI NEWSLETTER June 2019

3.世界でたった3つしかないうちの一つ デンマーク王室の特別注文 鷺のサービス



ビング オー グレンダールの芸術監督ピエトロ・クローンの代表作「鷺のサービス」のセンターピースです。24 人用のディナーサービスのセンターに飾るためにつくられました。1887 年に制作された最初のセンターピースは、1888 年にコペンハーゲンで開催されたスカンジナビア展覧会と、1889 年のパリ万国博覧会で、ビング オー グレンダールの展示コーナーの中心に置かれました。最後のオーダーは、1915 年にクリスチャン・ボーの王宮がオーダーして一式揃えた時であろうといわれています。これはそのときに王宮に納品されたもので、世界にたった3つしかないうちのひとつとされています。満開の花に鷺の姿を合わせた豪華なデザイン、洗練された色彩のハーモニー。世界中の人々を魅了し続ける貴重な逸品です。

ピエトロ・クローン《釉下彩鷺センターピース》1902～1914 年

展示会場の様子



アール・ヌーヴォー時代の家具やガラスとあわせて展示することで、19 世紀末にタイムスリップしたような気持ちで作品をご覧ください。趣向を凝らしています。展示作品はすべて撮影自由です。



Ⅱ. 特集：120年前の花瓶の「蓋の復元」

皆様にはおそらく馴染み深い(のではないかと思います)塩川博義氏所蔵の北欧磁器コレクションの展示で、そのなかから、今回はとくに「ピング オー グレンダール《釉下彩一夜茸花瓶》」に焦点をあてたコーナーを設けました。きっかけは塩川氏が見せてくださった 1897 年開催「北欧ストックホルム展覧会」について論じたドイツ語文献で、掲載されている写真を見て、「これだ!」と思ったのです。



これまでは左図のように蓋がない姿が「正式」だと思っていたのですが、当時は蓋がつけられていたことがこの文献の“発見”でわかりました。そして本来の「あるべき姿」を取り戻してみたいと思いました。蓋の復元には、長年にわたって釉下彩を研究しておられる陶器師の高木典利氏の手を借りる他は思いつきませんでした。花瓶の下方から上方に向かって、淡いブルーから若干黄色みを帯びた薄いピンクへとつながっていく微妙な色彩の移り変わりは、釉下彩だからこそその美しさなのです。

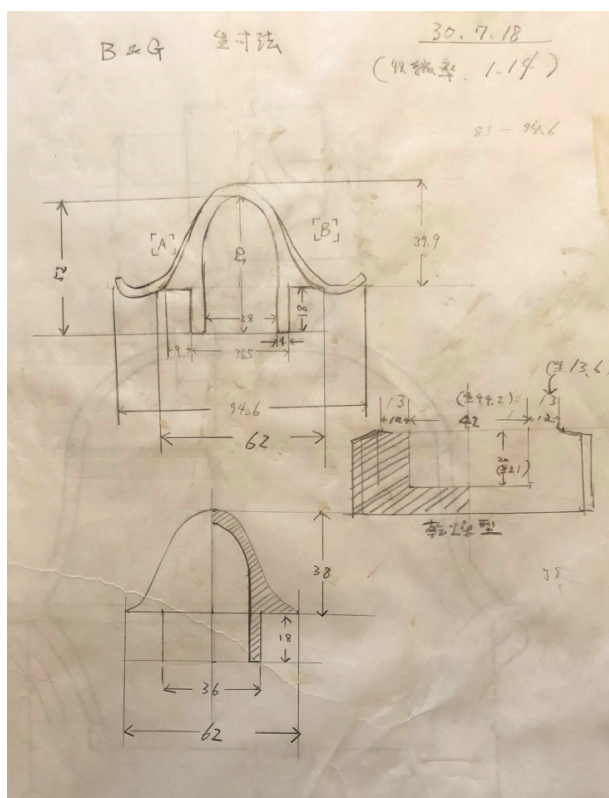
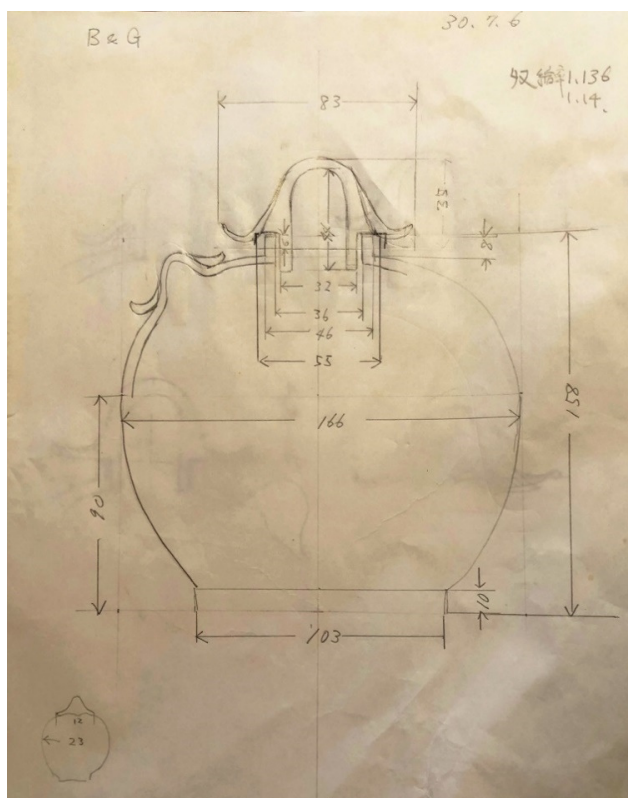
ところでこの“花瓶”（蓋がついていたので“花瓶”と呼び続けてよいかどうか疑問）ですが、見た目の大きさ(H15.8cm W17.0cm D16.9cm)にくらべて 1,752 グラムと非常に重いです。なぜこんなに重いのか。高木氏が「陶器師の性(さが)」で花瓶の口から手をつこんだところその秘密がわかりました。花瓶の外側一面に一夜茸を貼り付けるために、当時の作者は壺の口から手を入れて、内側から外側に向かってグーッと押してふくらみをつくっていたのです。その上にぺたぺたと茸の傘を貼り付けていくことで、全体の厚みが均等になり、焼いたときに一夜茸が落ちてこない、という仕組みなのです。壺の内側から押していくときに、生地が薄いと破けてしまうので、結果として重い花瓶になった、というわけです。



↓ 120 年前の作り方を踏襲して高木氏がつくったオリジナルの一夜茸花瓶 ↓



「小さな蓋」の復元、と軽く考えがち(なのは私だけでしょうか)なのですが、この蓋を再びつくるためには、まず最初に「花瓶全体の実寸法」を測って「(蓋を含めた)焼き上がりの断面図」を描き、そこから「生寸法」を割り出す必要があります。生寸法とは、粘土でつくった「焼く前の大きさ」をいいます。



左図が「花瓶全体の実寸法」を測って描いた「焼き上がりの断面図」です。花瓶の大きさを正確に図り、壺の口にかぶせる(焼き上がりの)蓋の大きさを算出しています。なぜこのような面倒な計算をしなければならないかというと、陶磁器(粘土)というものは焼くと 1.1 倍ほど縮んでしまうからで、その 1.1 倍というのが、実際はどれくらいになるのか「正確な収縮率」を調べないで適当に粘土で形作って焼いてしまうと、口に蓋が収まらないなどのトラブルが出るからです。小さな壺の口にちょうどあう蓋をつくるために、こんなことまでしなければならないのか…と頭が下がる思いがしました。「正確な収縮率」は粘土で定規のようなものをつくり、実際につかう窯で焼いてみればわかります。焼く前に 1cm だったのが、どれだけ縮んだか、それを見れば算出できるのです。今回の収縮率は 1.136 だったということで、約 1.14 として生寸法をはじきだしました。



粘土を窯で焼いて素焼きにした蓋に今度は色をかけていきます。釉下彩の特徴はなんといってもやわらかな色合いのグラデーションですから、「吹き付け」で色を施していく必要があります。今回は蓋の復元ですから、花瓶本体のような青からピンクへとつらなる色の変化をあらわす必要はありませんが、蓋のかたちそのものになっている「茸の傘」のヒダの部分に溜まった色と薄がけ部分の色が、もともとある花瓶と調和しないとはいけません。どの色をどんなふうに着色していけばよいのか、筆がよいのかエアガンがよいのか、どれくらいの濃さ薄さがよいのか、窯のクセ、窯のどこに置くのがよいのかなど、合計 5～6 回の試験が繰り返されました。色付けしたときと、実際に窯で焼きあげた時では色が違うので、写真のように何パターンものテストピースをつくり、それを毎回 1,300 度で焼いてみる必要があるのです。



できあがりです。手間のかかる仕事の積み重ねがあってこそ、美しい出来上がり／仕上がりがあるのだということを、今回の復元を勉強してしみじみ実感しました。ここにいろいろ書いてきましたが、これでもかなりの部分を端折っています。

それと今回は 1,300 度で焼いたわけですが、当時のロイヤル コペンハーゲンの記録には 1,435 度で焼いたとあります。高木氏いわく、窯のなかは場所によって 100～200 度くらいの差がでてくるそうですから、1,435 度というのは、あまりにも高すぎる、というか、一番高温の場所で計ったのではないかとのこと。本当は何度だったのか、正確に知るには、当時つくられていたものをもう一度焼いてみればわかるということでした。

いまのガス窯はどの場所に置いても温度が大抵は一定なので、焼いてみて何度で色が変わるのか、何度でかたちが変わるのか、見ればわかるそうです。いつか試してみたいものです！1,435 度で焼いたという記録が訂正される日が来るのかもしれませんが・・・。



今回修復を引き受けてくださった高木典利氏(1949 年生まれ)は高校 3 年生のときに西浦焼に出会いその魅力にとりつかれたそうです。西浦焼は、明治時代に多治見で発展した焼き物のひとつで、19 世紀末ころから釉下彩による絵付けが主流となりました。実際には 1899 年から 1911 年の間のたった 12 年間のみ釉下彩の生産を行っていたそうですが、名古屋や横浜、海外ではボストンに商店を持ち、1889 年パリ万博で銅賞、1904 年セントルイス万博で金賞、1909 年アラスカ・ユークン太平洋博で名誉大賞を受賞するなど隆盛を誇りました。けれども高木氏が西浦焼の再興に取り組んだときには西浦焼をつくる職人はひとりも残っていなかったそうです。時代が変わり、要求されるものが変わると、あっという間に技術が衰退してなくなっていってしまうし、また、新しい技術が出て来ると古い技術は淘汰されていく・・・陶磁器産業は、そうした盛衰が非常に激しい業界なのだそうです。



過日 5 月 5 日には、「ビング オー グレンダー ルー夜茸壺の復元を試みる」と題して講演下さいました。つくり手ならではの話にどんどん引き込まれていきました。後半はいつもお仕事でつかわれているロクロをまわして、実演してみせて下さいました。明治の技術はなくなっていかもしませんが、高木氏を通して知った知識はロクロの光景とともにわたしたちの目に焼き付いて経験にかわりました。心にずっと残っていくであろう一日になりました。